



株式会社セック

Systems **E**ngineering **C**onsultants Co.,LTD.

<https://www.sec.co.jp/>

銘柄コード：3741

2020年3月期 決算 説明資料

2020年5月25日

<目次>

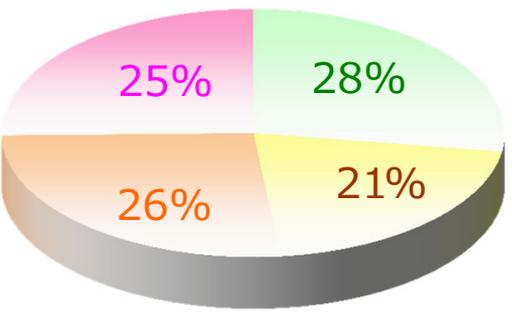
- 事業分野
- 2020年3月期 決算概要
- 2021年3月期 今期業績見通し
- 注力分野の状況 (IoT・AI・ロボット)

事業分野（BF）

リアルタイム技術が得意とする4つの分野

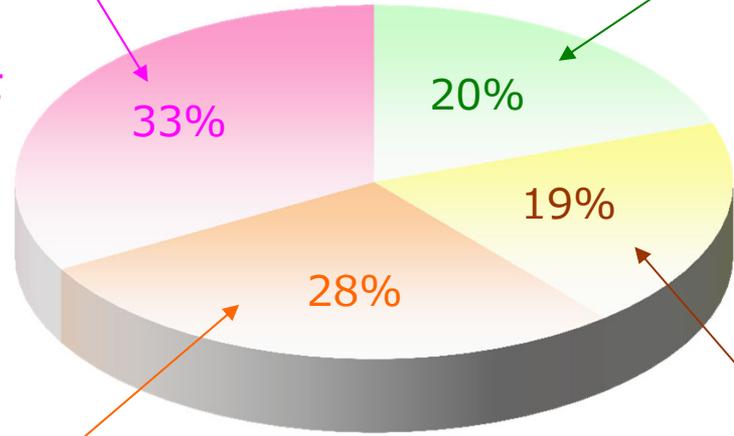
宇宙先端システムBF
宇宙天文分野と、ロボットやAIなど先端分野のソフトウェアを開発

モバイルネットワークBF
モバイルサービスを利用するためのアプリケーションや、モバイル機器の組み込みソフトウェアを開発



2019年3月期

需要構造の変化に応じて柔軟に対応



2020年3月期

社会基盤システムBF
医療、防衛、交通、官公庁向けなど社会公共性の高い分野のシステムを開発

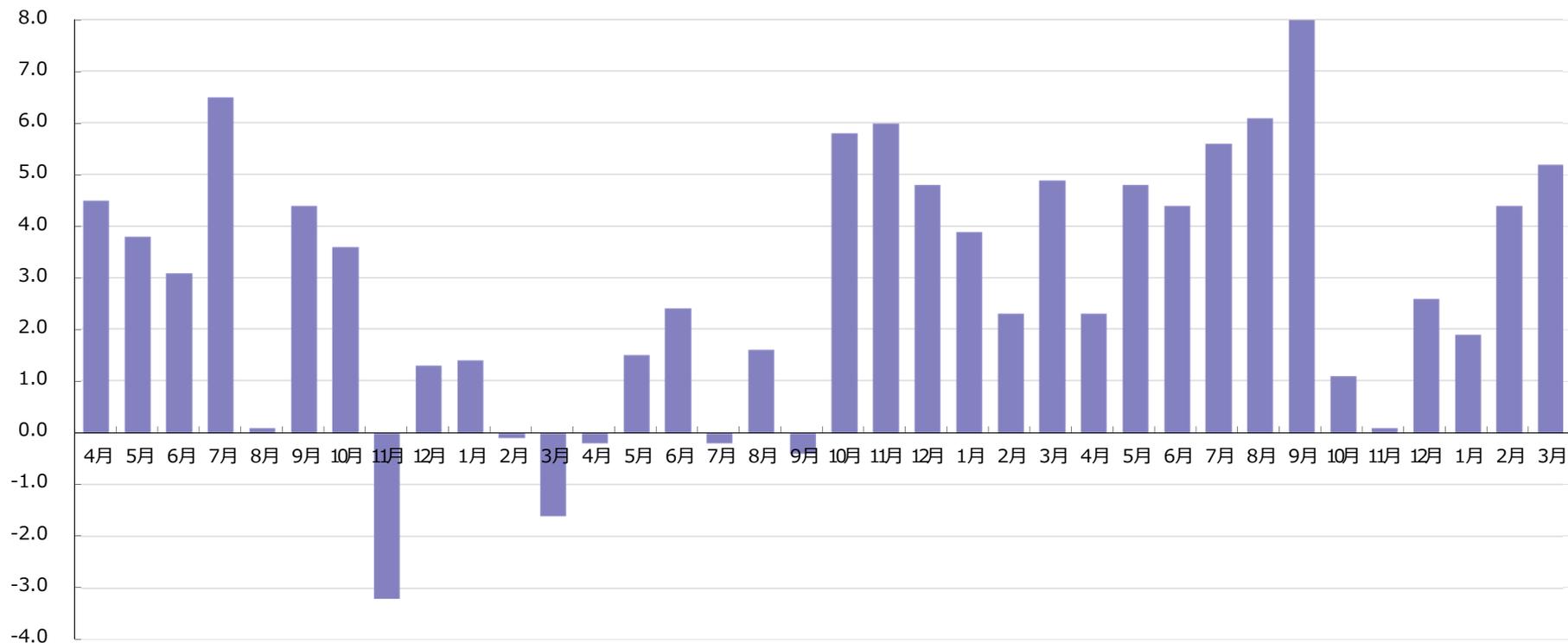
インターネットBF
非接触IC搭載のソフトウェアや民間企業向けのシステムを開発

2020年3月期 決算概要

2020年3月期の事業環境

情報サービス業売上高前年同月比推移（経済産業省：特定サービス産業動態統計）

単位：%



前年同月比の月別売上高は、2018年10月以降18ヶ月連続で増加しており、「IT需要は全体的には概ね堅調」と推察される。

2020年3月期総括

売上高、営業利益、経常利益の全てで過去最高、前年同期比で3期連続の増収増益

売上高	: <u>6,343</u> 百万円	前期比	6.1%増		
営業利益	: <u>930</u> 百万円	前期比	13.0%増	利益率	14.7%
経常利益	: <u>999</u> 百万円	前期比	12.4%増	利益率	15.8%
当期純利益	: <u>687</u> 百万円	前期比	12.1%増		

受注高、受注残高ともに過去最高、前年同期比で受注高は5期連続の増加

受注高	: <u>6,648</u> 百万円	前期比	3.7%増		
受注残高	: <u>2,345</u> 百万円	前期比	14.9%増		

先端技術を窮め、オープン・イノベーションで事業成長を目指す

- 需要構造が変化し、モバイルネットワークBFから宇宙先端システムBFへ、売上高比率トップのBFが交代
- 電機メーカー向けのスマートフォン関連の開発が減少
- 官公庁案件をはじめとした社会公共分野の開発案件が増加
- ロボットの研究開発案件や宇宙天文分野の開発案件が増加

損益計算書

	2019年3月期 (百万円)	2020年3月期 (百万円)	前期比 (%)	修正予想(10月) (百万円)	計画達成率 (%)
売上高	5,981	6,343	106.1	6,200	102.3
売上原価	4,310	4,568	106.0	4,420	103.4
売上総利益	1,670	1,775	106.3	1,780	99.7
販売管理費	847	844	99.7	860	98.2
営業利益 (営業利益率)	823 (13.8%)	930 (14.7%)	113.0	920 (14.8%)	101.2
経常利益 (経常利益率)	889 (14.9%)	999 (15.8%)	112.4	990 (16.0%)	101.0
当期純利益	613	687	112.1	680	101.2

売上原価 社員数の増加とベースアップ、確定給付年金の運用損の影響により人件費が増加
外注費も増加(外注費 20.3億円、前年同期比4.5%増、売上高外注比率32.0%、前期32.5%)

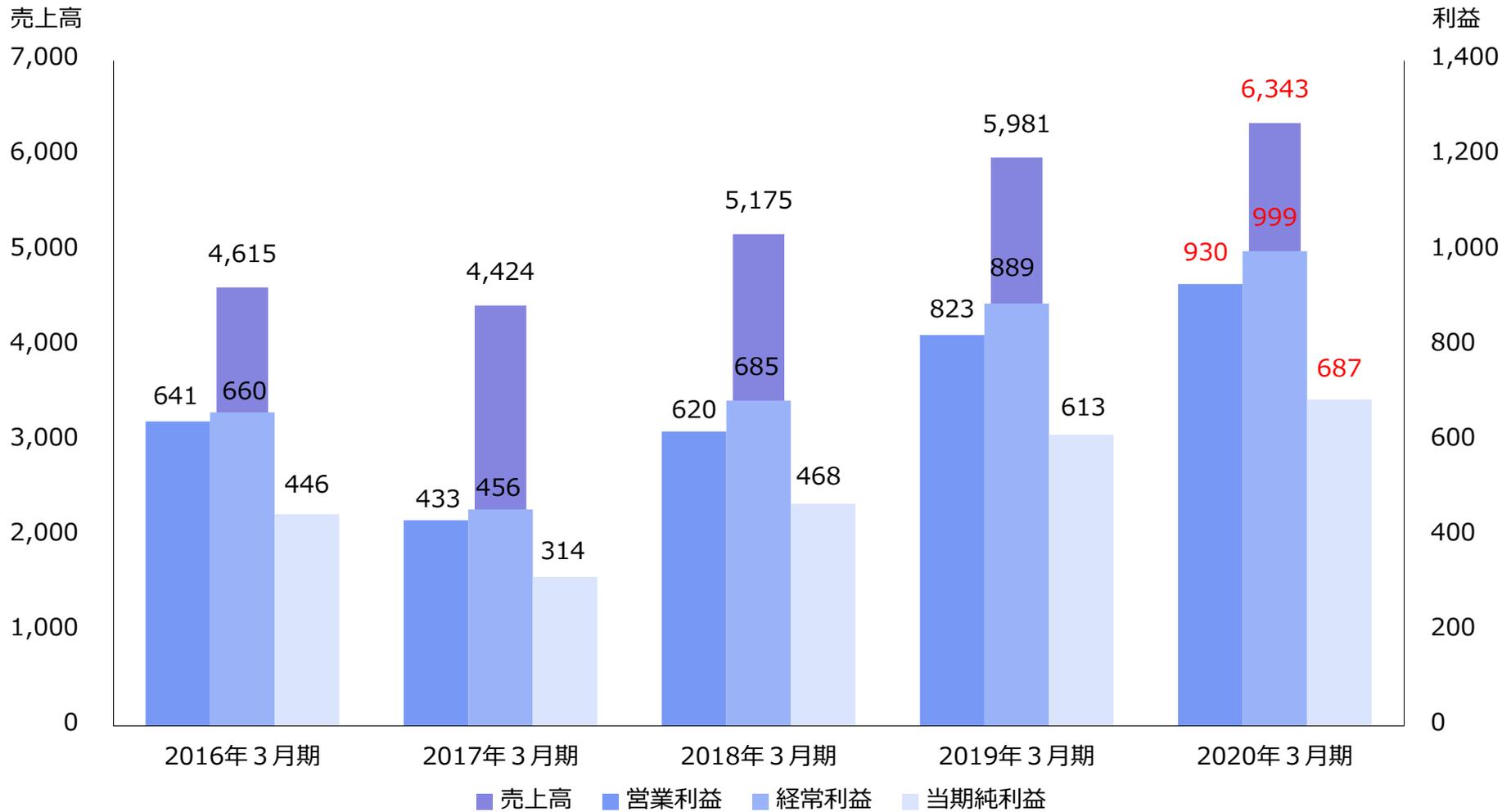
販売管理費 新入社員の増加などにより労務費が増加したが、研究開発費が減少
(研究開発費は71百万円で、前年同期比で15.6%減少)

営業外損益 研究開発の補助金収入は20百万円(前年同期は21百万円)、受取出向料が増加

決算業績推移（過去5年）

売上高、営業利益、経常利益の全てが過去最高

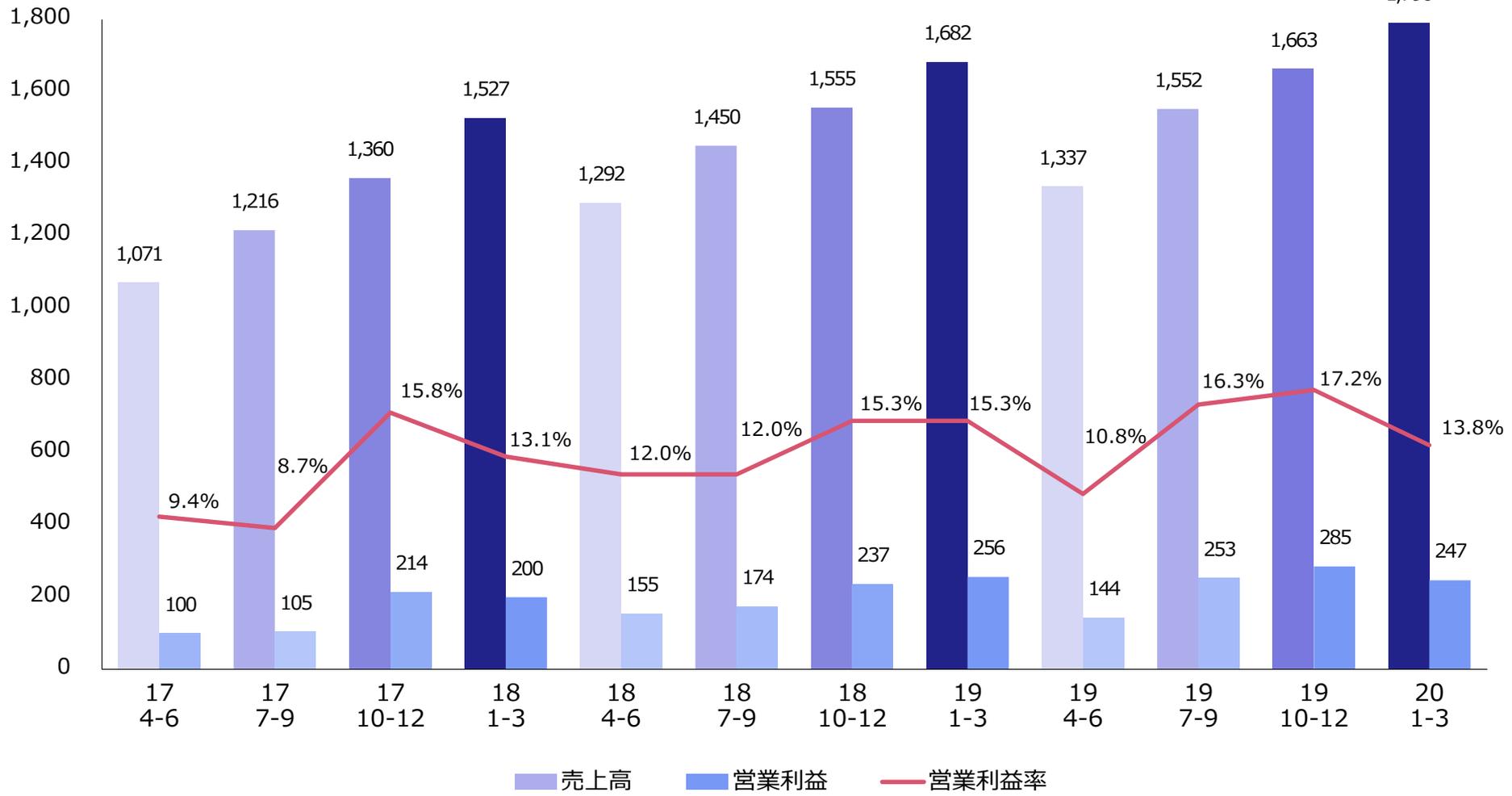
(単位：百万円)



四半期業績推移 (P L)

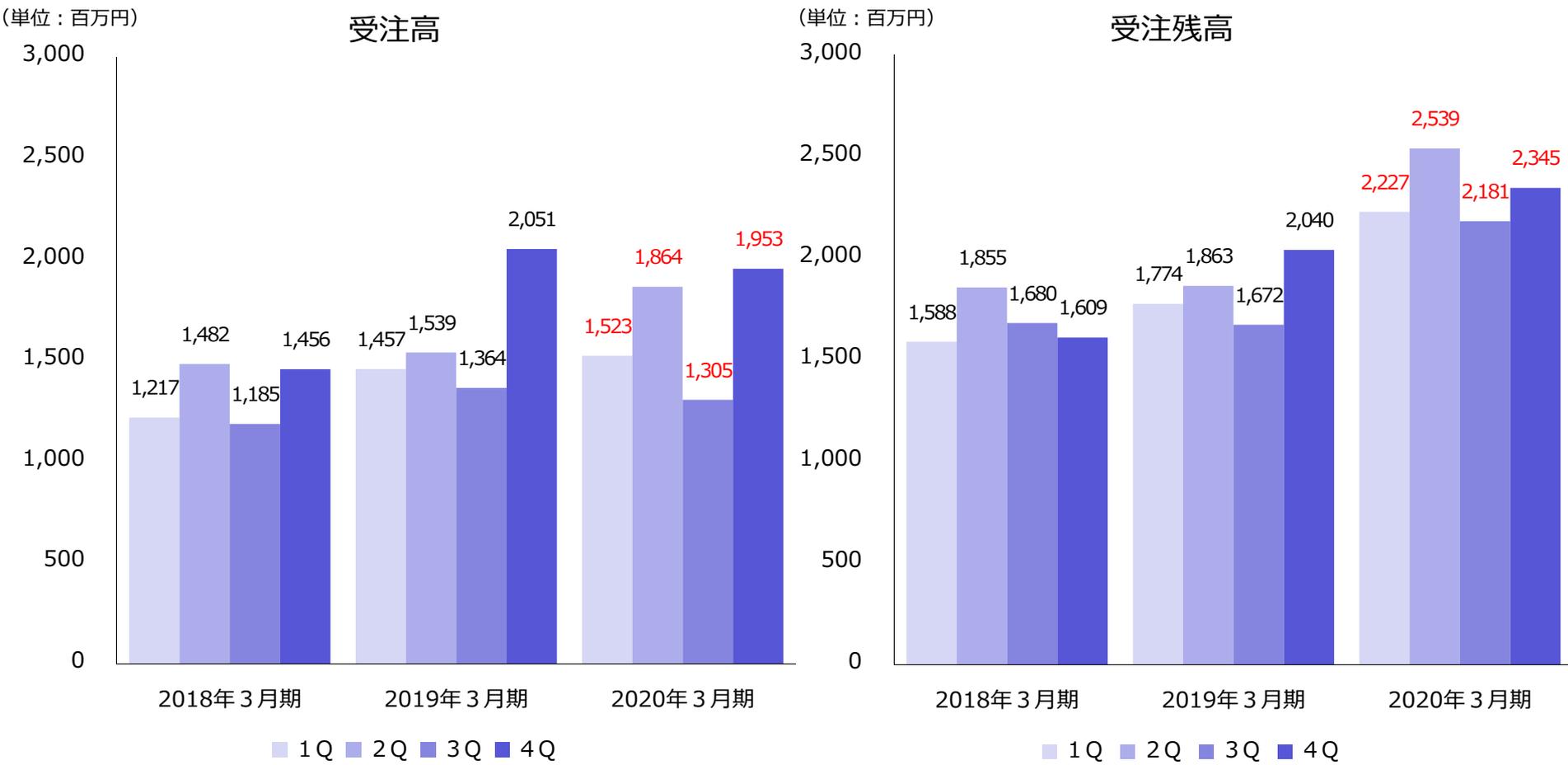
第1四半期は増収減益、第2・第3は増収増益、第4は増収減益

(単位：百万円)



四半期業績推移（受注状況）

受注高は第1、第2四半期で過去最高、受注残高は全ての四半期で過去最高



B F 別の状況

宇宙先端システム B F が大幅に増加

ビジネスフィールド	2019年3月期		2020年3月期		
	売上高 (百万円)	構成比 (%)	売上高 (百万円)	構成比 (%)	前期比 (%)
モバイルネットワーク	1,636	27.4	1,243	19.6	76.0
インターネット	1,252	20.9	1,226	19.3	97.9
社会基盤システム	1,577	26.4	1,769	27.9	112.2
宇宙先端システム	1,514	25.3	2,104	33.2	138.9
合計	5,981	100.0	6,343	100.0	106.1

- モバイルネットワークBFは、移動体通信事業者向けのサービス系の開発や電機メーカー向けのスマートフォン関連の開発が減少
- インターネットBFは、民間企業向けの大型案件の開発が堅調、非接触 I C 搭載ソフトウェアの開発が減少
- 社会基盤システムBFは、放送分野が減少、官公庁案件や交通系のモバイル決済関連の開発が増加
- 宇宙先端システムBFは、ロボットの研究開発案件が堅調、宇宙天文分野の開発が増加

B F 別受注状況

宇宙先端システムBFが大幅に増加

ビジネスフィールド	2019年3月期		2020年3月期			
	受注高 (百万円)	受注残高 (百万円)	受注高 (百万円)	前期比 (%)	受注残高 (百万円)	前期比 (%)
モバイルネットワーク	1,587	324	1,218	76.8	299	92.3
インターネット	1,292	273	1,246	96.4	293	107.4
社会基盤システム	1,983	1,089	1,841	92.9	1,161	106.6
宇宙先端システム	1,549	353	2,341	151.2	591	167.2
合計	6,412	2,040	6,648	103.7	2,345	114.9

(受注残高のうち、今期の売上高に貢献するのは2,014百万円、前期(1,671百万円)と比較し20.5%の増加)

- モバイルネットワークBFは、電機メーカー向けのスマートフォン関連が減少したため、受注高は減少
- インターネットBFは、非接触IC搭載ソフトの開発が減少したため、受注高は減少
- 社会基盤システムBFは、前期に大型の官公庁案件を受注した影響により、今期の受注高は減少
- 宇宙先端システムBFは、ロボット案件や宇宙天文分野の開発が増加したため、受注高は大幅に増加

期末貸借対照表

(単位:百万円)

	2019年3月末日	2020年3月末日	増減
流動資産	5,304	5,843	539
固定資産	1,737	1,670	▲66
流動負債	1,126	1,167	41
固定負債	121	96	▲25
純資産	5,793	6,251	457
総資産	7,041	7,514	472
自己資本比率	82.3%	83.2%	0.9%
流動比率	471.1%	500.7%	29.6%
固定比率	30.0%	26.7%	▲3.3%

流動資産 現金及び預金の増加などによる増加

固定資産 投資有価証券の減少などによる減少

流動負債 未払金、未払消費税等、未払法人税等の増加などによる増加

キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円)

	2019年3月期	2020年3月期	増減
営業活動によるキャッシュ・フロー	397	843	445
投資活動によるキャッシュ・フロー	▲132	73	205
財務活動によるキャッシュ・フロー	▲235	▲244	▲9
現金及び同等物の増減額	29	671	641
現金及び同等物期末残高	2,698	3,369	671

営業キャッシュ・フロー

税引前当期純利益の増加、売上債権の減少による収入増

投資キャッシュ・フロー

投資有価証券の償還による収入増

財務キャッシュ・フロー

配当金支払による支出増

2021年3月期
今期業績見通し

2021年3月期重点テーマ（背景）

ソフトウェアが主役の時代へ

「ソフト重視」「デジタル化」「ソフト主役」の3つのキーワード

「中途採用からM&Aへ → IT人材争奪戦は第2章、ソフト重視の時代へ」

- 人工知能（AI）をはじめ、目まぐるしい技術革新に対応できる即戦力の確保が急務となっている。中途採用では間に合わず、M&Aの件数が大幅に増加してきた。
- ソフトの技術が難しくなり、AI人材などソフトの高度専門家の時代が到来した。ユーザだけではソフトが難しく対応できない。ソフト会社のアドバイスが必要な時代。
- ソフト開発の内製化傾向が強まり、専門性が高い開発だけが外部に発注される。

「新型コロナウイルス後 → ニューノーマルはデジタル化へ」

- 新型コロナ後は、デジタル化、リモート化、省人化など、ITへのニーズは高まる。
- セックの技術を新型コロナ後の需要に対応させ、セックにない技術は、アライアンスを組むことで対応していく。

「プログラミング的思考の義務教育化 → ソフト主役の時代へ」

- IT人材の不足に対して、国をあげての「ソフト教育」が今期より始まった。
- 不足するのはAIやIoTなどの先端技術分野の人材で、高度な技術教育が必要となる。

先端技術を窮め、オープン・イノベーションで事業成長を目指す

「研究開発」「海外技術」「人材」の3つのキーワード

「研究開発」

- 新型コロナ後を見据え、キーワードは、デジタル化 = AI、リモート化 = IoT、省人化 = ロボットとし、引続き、研究開発に注力する。
- 1社完結の研究開発以外に、大学や国の研究機関との最先端技術でのアライアンスを積極的に推進する。

「海外技術」

- ロボット標準化技術の海外展開と米国のハードウェアを含めた最新技術の導入など、海外とのビジネスに挑戦する。
- 米国現地法人AMSECと協調し、グローバルビジネスを加速する。

「人材」

- 新型コロナ対策でのリモートワークを評価し、知的労働者の成長を促す働き方改革（ワークライフバランス）にトライする。
- AIを中心に技術教育をさらに強化。ディープラーニングに関する知識習得と経験を積み重ねる。

2021年3月期業績見通し

需要構造の変化への対応のため、売上高は微増の計画

(単位:百万円)

	2020年3月期 実績	2021年3月期 業績予想	前期比 (%)
売上高	6,343	6,400	100.9
売上原価	4,568	4,640	101.6
売上総利益	1,775	1,760	99.2
販売管理費	844	910	107.8
営業利益 (営業利益率)	930 (14.7%)	850 (13.3%)	91.3
経常利益 (経常利益率)	999 (15.8%)	890 (13.9%)	89.0
当期純利益	687	620	90.1

売上高	新型コロナウイルス感染症の影響により上期は減少、下期は回復、通期で微増の計画
売上原価	社員の約8割をリモートワークに移行、設備投資や昇給を含めた人件費の増加を見込む
販売管理費	間接部員の最適化による労務費の増加、研究開発への投資などにより、増加を見込む
営業外損益	研究開発の補助金収入が前期より減少

2021年3月期B F別業績見通し

前期同様に宇宙先端システムB Fが増加する見込み

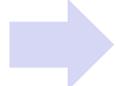
ビジネスフィールド	期初の想定	予想
モバイルネットワーク	移動体通信事業者向けのサービス系の開発は前期並みを見込むが、電機メーカー向けのスマートフォン関連の開発が減少し、全体では減少	↘
インターネット	民間企業向けのWEBシステムの開発が、設備投資抑制により若干の減少を見込む	↘
社会基盤システム	官公庁系の開発や防衛分野の商談が引続き堅調で、前期並み	→
宇宙先端システム	車両自動走行を含めたロボットの研究開発案件が堅調で、宇宙天文分野の開発も増加傾向にあり、全体で増加	↗

注力分野の状況

(IoT・AI・ロボット)

注力分野の状況 > IoT・AI・ロボット

研究開発テーマ「ユビキタス (Ubiquitous)」



基盤技術はリアルタイム技術

ユビキタス

身の回りの全てのものにコンピュータを埋め込んでネットワークに接続することで、私たちの生活を安全で安心、快適なものにするという概念

↑

[基盤技術]
リアルタイム技術

ユビキタスを具現化した技術

IoT

- ロボットIoT向けコンピュータビジョン研究
- MR技術を用いた次世代可視化技術 (JAXA)

ユビキタスのキーテクノロジー

AI (人工知能)

- 機械学習を用いた運用データの解析による宇宙機の故障解析 (JAXA)
- ロボット用人工知能・機械学習プラットフォーム開発 (早稲田大学)

ロボットソフトウェア共通化技術 (2003年より研究開発をスタート)

- NEDO次世代ロボット共通基盤開発プロジェクト (2005年~2007年)
- NEDO次世代ロボット知能化技術開発プロジェクト (2007年~2011年)
- NEDO基盤ロボット技術活用型オープンイノベーション促進プロジェクト (2008年~2010年)
- 経済産業省ロボット介護機器開発・導入促進事業



ユビキタスの究極の端末

ロボット

- RTM・ROS標準化技術・米国技術調査
- ロボット自律移動研究
- 知能処理の回路化(FPGA)とロボットプラットフォームへの適用 (九州工業大学)
- NEDOロボット活用型市場化適用技術開発プロジェクト

MR (IoT) – リモート化

リモート化の実用に向けて、5Gの特徴を活用したMRの研究開発を推進

- 5G（超高速、超低遅延、多数同時接続）が、今後、IoTの基盤となる
⇒5Gの特徴を活かしたエッジデバイスとしてのMRに注目
- MR技術を用いた次世代可視化技術（JAXAと共同研究）
- MRのビジネス化に向け、「Microsoft Mixed Realityパートナープログラム」のパートナー認定を取得 → HoloLens2が発売された

→ 商談は活発化してきているが実用化の開発はまだ先、有力技術として注力していく。

エッジコンピューティング (AI・ロボット) – デジタル化、省人化

デジタル化、省人化に向けて、FPGAを推進

- すべてのデータをクラウドの処理と連携するエッジ（端末）での処理が必要となる（エッジコンピューティング）
⇒エッジでAIなど高度な処理をするために、FPGA（プログラミング可能な半導体）が有力視されている
⇒FPGAはGPUと比較して、高負荷処理の高速化、省電力化を実現。プログラミング可能なデバイスであるため、ソフトウェアエンジニアとの親和性が高い
- 知能処理の回路化とロボットプラットフォームへの適用（九州工業大学と共同研究）

→ 技術的な壁が多いが需要は確実にあり、ビジネスモデルを含めて準備を継続していく。

ロボットビジネスの状況

実績 (2020年3月期 売上高約 1,410百万円)

← 前年同期約 1,137百万円 ← 前々年同期約 685百万円)

車両自動走行は大幅増、サービスロボットの研究開発案件も増加し、全体で前期比24%増

- 大手自動車メーカーからの車両自動走行研究ソフトウェアなどの研究案件が大幅に増加
⇒ 車両自動走行に関連したモビリティサービスやAIなどの研究開発案件も増加
- 大手自動車、重工、機械、電機、建築などのメーカーからの研究開発案件が堅調
⇒ 技術的には、システムエンジニアリング、ROS・RTM（ミドルウェア）などの標準化技術、
自社製品ソフトを使った製品適用開発案件が主流
⇒ 分野的には、無人搬送車、船舶、ドローン、警備、産業用ロボットなど広範囲
⇒ 顧客層は、拡大傾向だが、中小型の研究開発案件

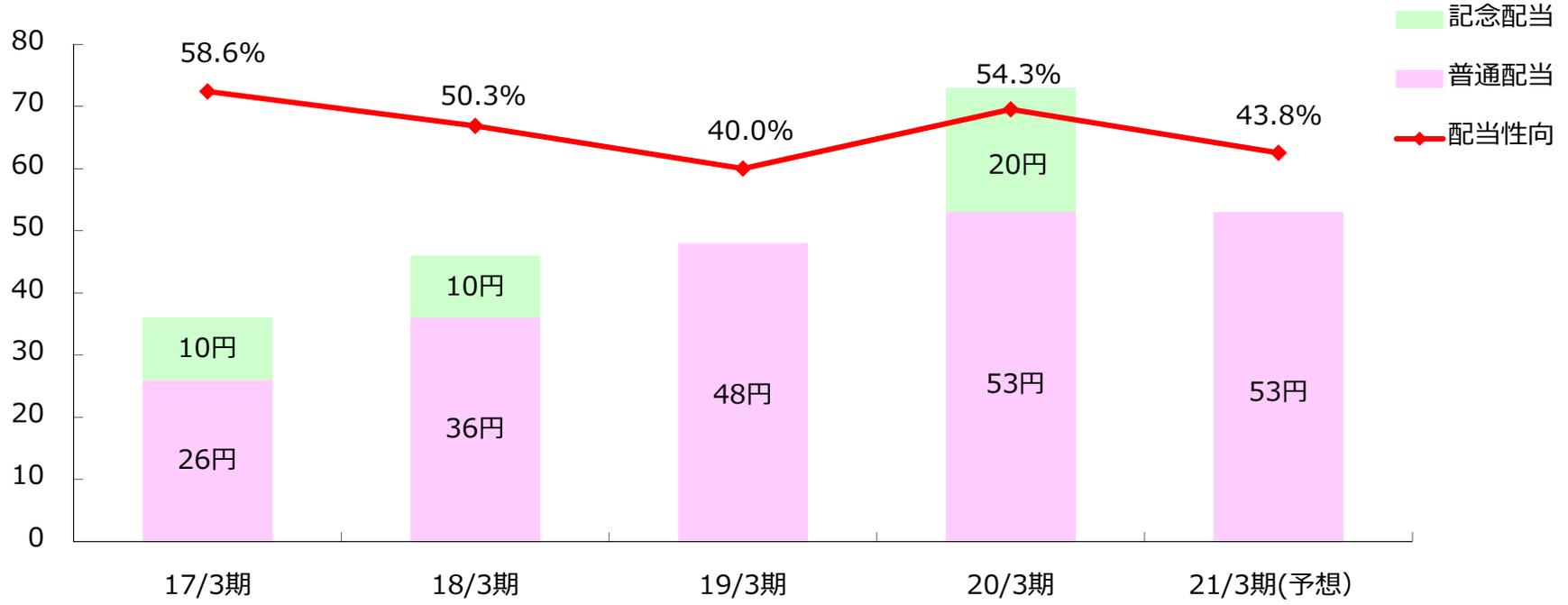
今後の方針 実用化に向けて、全方位でチャンスを見逃さない

3つの強みで展開

- ロボットソフトウェアインテグレーションビジネスの推進
⇒ ロボット標準化技術、試作機、製品化・実用化（ラストワンマイル）、教育、コンサルなど
- 製品適用ビジネスの推進
⇒ 自律移動ソフト(Rtino)、コンピュータビジョンソフト(Rtrilo)、機能安全ソフト(RTMsafety)など
製品+α（複数台制御、開発、教育、コンサルなど）のビジネス
- ロボット高付加価値化（ソフト会社しかできない）ビジネスの推進
⇒ ロボット+α（エンジニアリング、AI、MR、画像認識、RaaSなど）のビジネス

配当の方針

- 当面、配当性向は40%を目安とする。
- 2021年3月期は前期と同額の1株当たり53円の配当予想とする。



※ 2016年10月1日付で、1：2の割合で株式分割を実施していますが、2017年3月期の期首に株式分割を実施したものと仮定して配当金を表示しています。

- この資料の目的は、当社へのご理解を深めていただくためのIR情報をご提供することであり、投資の勧誘を目的としたものではありません。投資につきましては、ご自身でご判断願います。
- この資料には、当社の現在の計画、戦略、将来の業績に関する見通しなどが記載されております。こうした記述は、当社の将来の業績を保証するものではなく、経営環境をはじめ、さまざまな外部的要因の影響等により変化しうることをご承知おきください。
- この資料の作成に際しましては、細心の注意を払っておりますが、内容につきましていかなる保証を行うものでなく、この資料を使用したことによって生じたあらゆる損害などについて、当社は一切責任を負うものではありません。